

2019年9月30日発行
日本比較文化学会関東支部

2019年度第1号のレター発行となります。本号では、2019年9月7日（土）に神田外語学院にて開催されました「東北・関東支部例会」での支部会員の発表要旨について掲載致します。

日本比較文化学会関東支部事務局長 郭 潔蓉

◆第 51 回関東支部例会 ご報告◆

2019年9月7日(土)、神田外語学院 1-504 教室・1-505 教室において2019年度東北・関東合同支部例会及び第51回関東支部例会が開催されました。当日は二つのセッションに分かれ、10組の支部会員による研究発表が行われました。各発表において積極的な意見交換がなされ、大変有意義な合同例会となりました。以下、例会での会員の研究発表の要旨を掲載致します。

◆開会の挨拶: 関東支部長 近藤俊明(東京未来大学)

◆研究発表:

－ セッション A －

1. 日本の外国人児童生徒と公的領域の関係性

－不就学と日本語教育の事例－

バークレーハウス語学センター 非常勤講師
奴久妻 駿介

本研究は、日本の外国人児童生徒の不就学および日本語教育へのアクセスに関わる課題を政治思想の領域から考察したものである。アレントのリトルロックの省察に内包されている政治思想を讀解することで本問いに応じていくこととする。

今更ながら日本の外国人児童生徒を取り巻く諸課題を振り返るとき、つねに不就学の問題や、外国人集住地区と散在地区間における学校ごとの日本語教育の提供の格差が存在する事は、多くの研究者やNPO関係者、そして任意団体のスタッフらが指摘してきた事実である。しかし、これらの指摘は「解決すべき課題」という実践的な意義のみを前提にして論じられる傾向が強く、不就学解決および日本語教育の提供そのものの意味や、政治的言説が中心に置かれる事が少なかった。

そこで本研究では、アレントの著作の一つ『責任と判断』で描かれた黒人と白人の統合学校に子どもを通学させるようになった出来事を基に、多様性への配慮を国家主導で行う事の課題を日本の外国人児童生徒との関係から検討した。

アレントは「社会のすべての場所に平等性が浸透するほど、差異はますます強く感じられるようになり、外見からして自然に他者と異なる人々は、ますます目立つようになる」(Arendt, 2003 中山訳 2016, p. 370) と主張した。この指摘は、国家による多様性への介入が、複数性 (plurality) の織り成す討議

空間としての公的領域に侵入し、それを均一化してしまう事の不自然さを危惧するものとして解釈する事できる。日本の外国人児童生徒の場合も同様、不就学解決は、児童生徒の「日本の学校に行かない選択」に介入する暴力として、また、国家から提供される日本語教育は外国人家族の母語や継承語教育を意図せず軽視する可能性を秘めているのである。本視点を国内の多様性と教育の領域に導入する事は不可欠である。

Hannah Arendt (2003). Kohn, Jerome (ed.). Responsibility and Judgment. Knopf Doubleday Publishing Group. 『責任と判断』(ジェローム・コーン編、中山元訳、ちくま学芸文庫、2016年)

2. スタジオジブリのアニメーション映画に見る『子どもの成長』 —『となりのトトロ』における子どもの『分』という観点から—

防衛大学校 准教授
木下 哲生

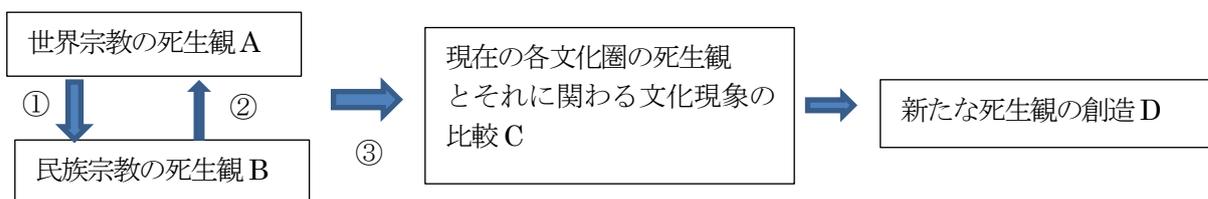
「となりのトトロ」の物語は、「子どもは分を守らなければならない」という暗黙の了解、つまり子どもならば誰でも知っていることを前提に話が進んでいく。その子どもの分とは、基本的には「にこにこ笑顔で元気であること」「親や年長者の言うことを聞くこと」「一人で勝手に出歩かないこと」「わがママを言ったりしたりして周りを困らせないこと」などであると思われる。これが守られている間は何もトラブルは発生しないし、トトロも現れてこない。この映画では、これらのような「分」をメイが外した時、トトロが助けてくれるというストーリーになっている。つまり、トトロは妖精的な存在だと考えられる。「子どもの成長」とは、エンディングロールでのメイの行動の変化に見られるように、「ほかの人に目を向け、自分ができることでほかの人の支えになる」ことに気付くということだと思われる。それが具体的には「お手伝い」に始まり、つづいて「自分より年下の子供たちの面倒を見る」に発展していくのではないだろうか。

3. 死生観の比較文化学構想

創価大学 教授
高橋 正

この発表で扱う死生観は、文化や文明レベルで捉えた死生観である。現在の文化・文明レベルの死生観がどのように形成されて、日常の生活の中に表れているかを比較検討する。死生観は魂の問題でもあり、宗教と密接に結びついている。この比較文化学の見取図を示すと図1-2のようになる。A-Dの分野と①-④のプロセスが「死生観の比較文化学」が扱う範囲である。

図1



世界宗教は民族宗教から派生しているのので、次のような発展のプロセス (④) も研究対象となる。

図2



A-D の分野では、それぞれの死生観の特徴を捉えるために、死生観に関する 10 の分析項目を提案する。

図1の①の下への矢印は、受容した世界宗教が、各民族宗教の死生観に与えた影響を表わしている。例えば、日本に当てはめると、古来の宗教である神道の国に、中国から仏教や儒教が導入された。その受容の結果は神仏習合であり、そこから日本独自の死生観を生み出している。儒教に関しては、死生観を受け入れずに、倫理的・道徳的教えを取り入れた。

③は、世界宗教の死生観と各民族の死生観が相互作用 (①と②) する歴史的変化のプロセスを示しており、その結果、世界宗教の変容と伝統的な民族宗教の死生観の残存となり、各文化圏で独自の死生観とその文化現象を生み出している。

C の分野では、2つの国・民族の死生観を比べるときには、①-③のプロセスの違いが、現代における2つの国・民族の死生観の違いとなっていることを示す。D の分野は、文学、アニメ、映画などを媒体にして、あるいは、葬儀儀礼の変化などから、それぞれの文化圏でどのような新しい死生観が生み出されているかを比較検討する。

4. 明治期カトリック宣教師における日本観の諸相

神戸松蔭女子学院大学 教授
木鎌 耕一郎

1858 (安政 5) 年に幕府が欧米諸国と修好通商条約を結ぶと、長崎、横浜、函館などの開港地にキリスト教諸教派の宣教師がやってきた。カトリック教会による日本宣教は教皇庁の方針によりパリ外国宣教会が担っており、条約締結後に多くのフランス人宣教師が来日した。英米のプロテスタント諸教派の宣教師は士族層・上層階級の要請に応え、教育を通して日本の近代化・文明化に寄与した。一方、幕末・明治期のカトリック宣教は、近代化に伴う世俗化に対する対抗姿勢を背景に、ド・ロ神父による長崎外海地方における福祉活動や、テストウィード神父による神山復姓病院でのハンセン病患者への治療、サン・モール会等の女子修道会による孤児院や診療所の設立などに代表されるように、近代化の陰で取り残された孤児や貧者への慈善活動が中心で、プロテスタント諸教派のような上流階級への近代的教育への展開は立ち遅れ、ようやく明治末になって教皇庁の方針転換により、フランス人に限らない修道会による高等教育機関の運営、すなわち 1908 (明治 41 年) の聖心会による聖心女子学院の設立、1913 (大正 2) 年のイエズス会による上智大学の設立に着手された、というのが一般的な見方である。本発表では、このような全体的な状況の中で、実際には日本宣教の方針についてパリ外国宣教会の内部において多様な見解があったことを、宣教師を辞めた後もなお日本との関わりを捨てなかった人材に着目して明らかにしたい。

5. 再依頼から合意形成に至る断りの会話の展開構造

—断る側の日本語母語話者と中国人日本語学習者の比較—

筑波大学大学院 博士後期課程
高揚

本研究では日本語母語話者（以下 JJJ）と中国人日本語学習者（以下 CCM）が接触場面でのコミュニケーション上の誤解や不愉快さを減らすための一環として、依頼側の日本語母語話者の一度行った依頼を再度行うという再依頼に対し、最初は断るが最後に受諾した場合、断る側の JJJ と CCM における、再依頼から合意形成に至る断りの会話の展開構造を比較した。その結果、再依頼に対し、断る側が JJJ の場合、断る側の JJJ は積極的に代案提示をせず、代案提示を依頼側に任せ、依頼側からの代案に合わせるという「依頼側の{代案提示}による合意形成」の展開構造が多い。一方、断る側が CCM の場合、断る側の CCM は積極的に代案を提示し、断る側からの代案に合わせるという「断る側の{代案提示}による合意形成」の展開構造が多い。この結果から、代案の使用によって最初は断るが最後に受諾した合意形成に至る断りの会話の展開構造が異なるということがわかった。

6. 露伴における「骨董」の意味すること

—「美術」の圏外として—

宇都宮大学大学院 博士後期課程
梁 鎮輝

幸田露伴（1869-1947）はその文学世界においてしばしば「骨董」を重要なメタファーとして用いてきた。例えば、「太郎坊」（『新小説』明治 33 年）の〈董模様の永楽猪口〉、「木偶土偶」（『日本』明治 38 年）の〈刺繍帛〉、「骨董」（『改造』大正 10 年）の〈寶鼎〉、「観畫談」（『改造』大正 14 年）の〈春江図〉、「幻談」（『日本評論』昭和 13 年）の〈野布袋竹の竿〉などが挙げられる。

「骨董が重んぜられ、骨董蒐集が行はれるお陰で、世界の文明史が血肉を具し脈絡が知れるに至るのであり、今までの光輝が吾曹の頭上にかざやき、香氣が我等の胸に逼つて、そして今人をして古文明を味はしめ、それから又古人とは異なつた文明を開拓させるに至るのである」という露伴自身の言葉からも分かるように、「骨董」は世界の文明史を理解する道具だけでなく、新しい文明を開拓する際に必要な動力源でもあったと考えられている。この言葉に込められる深層の意味はさらなる緻密な究明を要するが、いずれにせよ露伴にとって「骨董」は決して軽視すべきものではないと考える。

しかし、そうであるにもかかわらず、従来の研究において個々の作品に関する分析はあるものの、複数のテキストを横断的に、露伴の創り出そうとする「骨董」の思想空間はどのようなものであったのかという問いに応える研究は管見の限りではなかった。

従って、本発表はその試論として新たな考察を呈示し、さらに岡倉天心をはじめとする多くの知識人によって受容・構築されつつあった「美術」という近代西洋の概念とは如何なる関係性を持つのかについても分析を試みる。

1. ジラールの欲望三角形を漱石の「こゝろ」で考える

スロヴェニア大使館
茂石 チュック・ミリアム

夏目漱石は日本で最も重要な近代作家の一人として知られている。氏は1906年頃に、近代小説に欠かせないこととして自分のノートに「三角関係」の図を残し、「三人の人物を交錯して無限の波乱を生ずる」⁽¹⁾と述べている。氏は三角形を明らかに意識し、それが近代小説の欠かせないものであることが明らかである。しかし、図は一次元なものなので、人物の間に生じる感情が特定できないと思われる。だから、半世紀後近く、ジラールという文芸批評家が、西洋文学の作品を通して男女三角関係について発表している。このような関係を明確定義していないが、媒介者(médiateur)―主体(sujet)と客体(objet)という概念は、「欲望の三角形」と表現を用いることができる。ジラールの図式で男女間に生じる感情などが明確化されているので、より詳細な図だと認識される。氏の図を使い、漱石の「こゝろ」で作家自身が意識的に作った三角形が反映されていることと考察する。

注

- (1) 漱石全集 19 : 1995 「日記・断片 上」 東京 : 岩波書店、254.

2. 呪われた英雄と政治的仮象

弘前大学 准教授
横地 徳広

ソポクレス『アンティゴネ』の日本語訳者中務哲郎の説明によれば、「古代ギリシアの観客は物語の概略は知った上で劇を見た」。それゆえ、「わが子に殺される」という「神託」を破ってテーバイ王ライオスが妻イオカステとのあいだに作った子がオイディプスであり(*Oedipus*, 710, 410-460)、彼の「知恵」に物語が駆動されることを観客は承知のうえである(*Oedipus*, 390)。出来事の時系列では「テーバイ三部作」の最後に位置する『アンティゴネ』では、オイディプスが自分の母とのあいだにもうけた子供たち4人の末路が語られる。そのうちの兄弟2人による殺し合いのあと、アンティゴネは、母にして祖母であるイオカステの実弟テーバイ王クレオンを相手に、アンティゴネの次兄ポリュネイクスの「埋葬」をめぐる争いを起こす(*Antigone*, 20-85)。

この『アンティゴネ』は、ライオスとイオカステの呪われた一族それぞれが自分らしさを発揮するほどに「受苦」を呼びこむ悲劇として、やはりその正統(として)理解されるのがふさわしい(*Poetica*, XI, 1452b10)。

これに対して、ドイツ観念論を代表する哲学者ヘーゲルはその主著『精神現象学』においてアンティゴネとクレオンのこの対立を「家族の法」と「国法」の対立(として)解釈し、悲劇を「政治劇」にすりかえる「政治的仮象」を生み出したのではないか？

本発表ではまず、そうしたヘーゲル的解釈の政治的仮象が現代の古代ギリシア理解にまで影響をもつ様子を確かめたい。次に、これとは別の仕方でもソポクレスやアイスキュロスの悲劇、さらに遡ってホメロス『イリアス』に登場する英雄たちの詩的な在りようを考察したい。このとき、20世紀を代表する哲学者ハイデガーのソポクレス解釈を参照する。

凡例

アリストテレスの著作はOCTを参照し、ラテン語タイトル、巻、頁、ab…、行を示す。ソポクレス作品は*Sophocles Volume I, II* (Loeb, 1994)を参照し、*Oedipus*、*Antigone*のあと、行を示す。

3. 画像解析を取り入れた印象評価分析ツールの開発の報告

－ WEB アンケートツールおよび画像解析ツールの改良 －

京都経済短期大学 教授

森崎 巧一

湘北短期大学 准教授

高木 亜有子

本研究は、これまで開発を行ってきた印象評価分析ツールについて、特にWEB アンケートツール及び画像解析ツールの改良部分について報告するものである。

まず、「印象評価」及び「一対比較」の調査及びデータ管理が容易に行えるWEB アンケートツールを開発した。本ツールは、分析者と被験者の両方に対応し、画像を用いたアンケートを容易に作成したり実施したりできるツールとして完成させた。そして、本ツールは、分析者がアップロードした画像をアンケート上でランダムに表示する機能、アンケートページをランダムで表示する機能、アンケート結果をテキストファイル及びCSV ファイルで出力する機能、印象語を容易に選択及び入力できる機能など、多くの機能を実装している。

次に、「画像解析ツール」の開発では、既存の複数の画像解析方法をOpenCVを用いて試し、デザイン画像の特徴が分析しやすいものを絞り込んだ。その結果、本ツールには、「色相分析」、「シルエット近似」、「フーリエ解析」、「ハフ変換」を扱うことにし、これらの画像解析結果をCSV ファイル及び画像ファイルとして高速に出力できるようにした。色相分析は、画像に含まれる色相や彩度、代表的な配色パターンなどを出力し、シルエット分析では、画像に含まれる造形の傾きや外形のサイズなどを出力し、フーリエ解析では、画像の周波数成分を出力し、ハフ変換では、画像中に含まれる円を検出した結果を出力することができる。

4. 一対比較と画像解析を用いたロゴマークの類似性分析

湘北短期大学 准教授

高木 亜有子

京都経済短期大学 教授

森崎 巧一

ロゴマークとは、企業やブランドのイメージを印象づけるようにロゴタイプと呼ばれる文字やマークを組み合わせて図案化したものである。新たなロゴマークが作成される場合、既存のロゴマークの商標権等の知的財産権を侵害しないよう、既存のロゴマークと類似しないようにデザインされる。ロゴマークは、形状や文字の形、配色など、様々な要素を組み合わせでデザインされるが、そもそも人はどのようなデザインを似ている、似ていないと感じているのであろうか。

そこで本研究は、ロゴマークのデザインから受けとる人の主観的類似性の検討を目的に、一対比較と画像解析を用いて調査した。調査するロゴマークは1964年から2020年までの夏のオリンピックのロゴマ

ーク 15 点を対象とした。短期大学生 28 名、教員 2 名の合計 30 名に一対比較アンケートを行い、ロゴマークの類似度を 5 段階で評価してもらった。アンケート結果は、共同研究者の森崎らが開発した印象評価分析ツールの主座標分析ツールを用いて分析し、類似度の大きいもの同士が近い配置となるよう、2 次元平面上にプロットした。また、印象評価分析ツールの画像解析ツールを用いて、ロゴマークの色相や傾き、シルエットを分析した。さらに、画像の表象（人、星など）などの主観情報との関係性を調査した。その結果、ロゴマークの表象、色の数、シルエットの形状などである程度の類似性を説明できることを確認した。

◆閉会の挨拶：東北支部長 伊藤 豊（山形大学）

*閉会后、懇親会を開催した。

.....

◆次回の支部例会・2019年度関東支部総会のお知らせ：

- 日時：2020年3月21日(土) 午後13:30 ~ 18:00(予定)
- 場所：東京未来大学
〒120-0023 東京都足立区千住曙町34-12 / TEL:03-5813-2525
- 研究発表：発表約25分、質疑応答約5分を予定
 - * 研究発表御希望の方は、発表テーマを3月3日(火)までに、要旨を3月12日(木)までに、支部事務局(東京未来大学 郭研究室:kaku.iyo@tokyomirai.jp)までお送りください。(要旨は500~800字程度、Word ファイルにてご提出をお願い致します。)
 - * 支部例会閉会后、2019年度関東支部総会の開催を予定しております。
 - * 終了後、懇親会(会費5000円以内)も予定しております。奮ってご参加ください。

以上